

鳳凰堂の佛教美術的価値

序論

高橋成夫

宇治平等院の鳳凰堂は、實に藤原時代に於ける日本芸術の發達の極長に位する物で、此世ながらの極樂にも比すべき一大宝殿と稱せられる。道長の建てた法成寺がその美を文書に詠ぶるに過ぎない今日に於て、残存せる藤原時代建築の最も傑出した物は、此の鳳凰堂である。始めは阿彌陀堂を始め、經堂、金堂、二重塔、三重塔、講堂、鐘樓、東西法華堂、北樺門、五尊堂、南大門、西大門の堂宇があつたが今は悉くこんでた。阿彌陀堂を残すのみである。此の堂は本堂、翼廊、後尾から成りその形が況も鳳凰の翼を張つた如く見えるので後世鳳凰堂と稱するのである。御堂は藤原時代に於けるあらゆる工巧の粹を兼ねた物で、その構造は、高低起伏し、変化錯綜の物を極めている。堂の外壁はすべて赭く塗り、円部は金碧の光まばゆく円陣の柱、天井華悉く優美なる宝相華の文様を以つて彩られ、傾流柱を初め、天蓋、天井、すれも極美なる螺鈿を鏤りている。そして中央の壇には阿彌陀如来を安置し、その周囲の壁や柱には觀經變畫、高種なる事は殆んど他に比類を見ない。然もその燦然たる内飾の裝飾と端麗なる本堂の構造とが堂の正面の池水に映じた様は、正に親至の極樂浄土そのままの美観であつたらう。当時「極

樂不審しくは、宇治の御弁を礼へしと云へ云はれた。(後拾遺往生伝)

此の様に平兵衛の鳳凰堂は鎌倉時代の善美な建築、絵画、彫刻、工芸等各種芸術の粹を集めて当時の浄土思想を表象せる大切なる遺構であつて、その重宝さは飛鳥時代の法隆寺等に比較しても勝るとも劣らないのです。尤も建築、彫刻、絵画、装飾などの方面から部分的には紹介され、論評された事はありませんが徹底せる研究の乏しいのを非常に遺憾と思ひます。よつて吾人はあらゆる方面から鳳凰堂その物の真相を明らかにしたいと思ひます。しかし鳳凰堂は阿彌陀仏の浄土に擬した物で、その周囲の光林泉の美、その建築美、内部の荘嚴美、扉及び壁面に描かれた觀經の説相図など、何れの部分に於ても鎌倉時代の日本化せる浄土思想を遺憾なく、且、具体化してゐる。即ち鎌倉時代の浄土觀より生まれた社会相の一面を今日如突に見る事の出来る遺構である。此の真に於いて鳳凰堂の價值は唯一無二と云うべきでありませう。

本論には

- (一) 平安時代の思想 人生觀と仏教
- (二) 鳳凰堂建立の動機
- (三) 鳳凰堂の構格とその和平諧調の美
- (四) 正覚相阿彌陀仏と中殿内部の荘嚴美
- (五) 裏中供養菩薩の律動美と虚空梭の荘嚴美
- (六) 中殿の扉及び壁面に描かれたる觀經所説の四相
- (七) 後面の扉に描かれたる日想觀

(い) 須弥壇後壁の極樂淨土及修禪儀式の因

以上の様な順序を持つて、鳳凰堂の仏教美術的な価値に就いて筆を行きたいと思ひます。

直めて

本論

(一) 平安時代の思想と人生觀

平安朝の人々には自己の生活とは何であるか、人生とは如何なる物であるかと云う問題が次に大きく現はれて来た。殊に此の時代の中期から末期にかけて此の問題は彼等の思索及び感情生活にも妨さかけた。そして彼等は此の問題に対する解答を結局仏教的な人生觀に見出して現世をほかなみ、来世の世界に憧れるに至つていたのであるが、此の處に就いて注意すべき事は、斯る人生觀の問題は、たゞ彼等に偶然仏教的な知識を与へられた故に、彼らによつて取り上げられたと考へる事は出来ないと云う事である。人生觀とは結局吾人の生活感情の統一と哲學化である。平安朝人の人生觀の特質は矢張り彼等の尸体的又社会的環境の中に自然に胚胎せられて来たものであつて、知識としての仏教はそれらの胚胎せられた人生觀の各要素の具現化、体系化に際して取上げられて来たのである。勿論此の時代の仏教は、その教理に於てその世界觀に於て、絶対的な真理として君臨していた。人々は自己の生活に對して持つ思念や感慨を此の真理によつて來の、權威附けたのであるが、その際矢張り、その広大な教への中に於て、平安朝としての特に後世としての撰状が行はれ、貴族社会に適合した要素が強調せられ、此處に淨土教の発達が現はれ

て来た。一般に此の時代の人々の現実生活は、余りにも仏教的な彼岸的な物に没されて居り、これと同時に彼岸の仏教に對する信仰生活は余りにも世俗的色彩が濃いと云はれて居る。併しながら此の二面は、決して相容れざる矛盾ではなかつた。それは單なる教理への生活の没入ではなく、又單なる信仰の世俗的墮落と見なさるべき物でもなり。即ち此の二面こそ、彼岸の生活と信仰との密接なる相即を示している物であり、その相即の根柢には貴族社会に育まれた憂世的人生觀が種たはつて居るのである。彼岸にとつては此の世は即ち憂世と觀ぜられていた。而して此の憂世の思想には物怪怨靈に對する恐怖や、平安朝末期に於ける社会的變動による貴族達の絶望を合せて考へねばならぬ。要するに此の思想が彼岸の社会的文化的地位、又は至若その物の中に胚胎された物である事は先ずオ一に注目されねばならぬ事であつた。然るに一方に於て平安朝の仏教は二つの方面から、此の憂世思想を理論附けて居る。即ちその一つは厭離穢土の思想であり、他は未未來の思想である。往生要集に依れば、厭離さるべきは三界六道の中、人間の世界は次の三つの相によつて眺められて居る。オ一は不淨の相、オ二は苦の相、オ三は無常の相

即ち往生要集は人生の相を不淨と苦と無と無常との三相に於いて眺め、現世否定の態を示している。自らの心に欠くも苦の相と、無常の相とも痛感する彼岸平安朝貴族達は、いよいよ此の世を憂世と觀じ、自ら出學の途を求めざる態度を急がねばならぬ。しかもただ人生一般が厭離さるべき物のみでは無く、彼岸の住む時代その物が最早や絶望の世代であると云う觀念が、彼岸を以ていよいよ現世の価値を見失はせて居るのである。即ちそれは末世の思想であつた仏教に於ては時代区分として、正、像、末の三時説なるものが唱へられていた。此の三時説の事教には異説が

あるのであるが、一例によつて云へば、正法の世とは仏の滅後五百年間を云い、此の時代に存つては教、行、證皆存し諸比丘の解脫堅固である。次に像法の世とは正法に次ぐ十年であつて、此の時代は教、行のみあつて證果の物なく、佛の教へ漸く訛替して造寺造塔のみ盛なる時代で、次の末法とは像法以後一万年であつて、此の時代には教のみあつて行無く、證果なく、鬪諍堅固、白法隱没すと云はれた時代である。然らば平安朝は、此の三時の如何なる時代に相当するのであるが、最證の末法燈明記弄によれば、仏滅十五百年以後は末法の世に入るのであるが、仏滅は法上法師弄阿闍梨に依つて言う所に依れば、仏は阿の初五主穉王涵五十三年生申に入滅し、又資長房、營春秋によつて言う所に依れば、仏は阿の初二十一主匡王班の四年壬子に入滅せりとされてゐる。前者に依れば、今延暦二十年辛己は仏滅後十七百年目に當り、後者に依れば、千四百百年目に當つてゐる。「故に知る、今の時は是れ、像法の時也。彼の時の行事は即ち末法に同じ」と即ち延暦廿年に於て像法の初めに入つてゐる。此の事は當時の人々の心を刺戟せずには置かざつた。仏教が貴族社会及び一般民衆の精神生活と密接な關係に置かれていた此の時代に、此の時代觀念は強く人々の心に植ゑ附けられた。造塔の世、鬪諍堅固、仏法破滅としてやがて救ひなき地獄の苦が彼弄に襲ひかゝると云う運命を恐れなければならなかつた彼弄は、自己の世を「ぼく、末のの世」「独世末代」と呼んでゐる。そして末の世の總ての事に希望を失ひ、現世的な營みの何物にも其の価値を認める事が出来なくなつた。まして院政時代の教限りなき造寺造塔の時代に續く僧兵の横暴、保元平治の乱、平家源氏等の打ち續く戦乱、天災、武士の跳梁と貴族社会の動盪、それらを目のあたりに眺めた人心には前述の如く王法仏法の滅盡、天下の破滅此の時の時に

あるかと歎せられなければならなかつたのである。今や厭離穢土、欣求淨土の思想は彼等の心の奥底深根を下した。平安朝貴族の生活感情、例へば「物の哀れ」への心情の傾き、憂き世への思索の傾向等は仏教による現世と来世との二つの世界の爲めの最も良き温床であつた。精神的にも物質的にも、自らの生活を遮んで取り崩して行く事なく、周囲の總ての現象に對して唯恐れ、唯恐ろのみであつた当時の貴族には因果の理、運命の絆、六道輪廻の悲しみも彼等の眼の前に現実として横たへられていた。斯くて現世の價值は見失はれ、現世世俗の行爲は即ち罪、それのみならず、現世に心を留むる事、それ自体が罪劫となつて世間の苦果を招くと考へた。唯だ現世世俗の営みはそれが仏の世界へ奉仕せしめられる事によつての價值がある。俗世の徳悪はそれによつて初めて流はれ、美は、き物は淨淨を得、光ある物は光明を著す。斯くて考へられるに至つて人々現世の営みとして残された眞は自ら二つである。

㉑、は自己の誠心と毅力とを盡して仏の爲に奉仕する事、即ち仏の世界を現実に體はしてその現世の淨土に自らの心を總はせる事。

㉒、は此の世にありて憂き世から脱れ出る事、即ち俗世から脱れて出家入道し現世に必要ぢかに後世に往生淨土の樂しみを待つ事。

即ちそれである。石の如く人の一生は出家の本意によつて大きく導かれる。文學に於ける狂言綺語の罪は讀仏衆の縁たる事によつて救済せられ、音楽は極樂の音楽に通はせる事によつてのみ認められてゐる。彼等が自らの爲に見出した美は即ち寫眞、佛像、寺塔の莊嚴に使用されて初めて心奪らかに樂しむ事が出来た。又法文歌は仏教に於ける和讃が民衆歌謡として流行した物であつて、此れを通じて仏教の情緒と哲理とは容易に人々の胸に菘がつて行つた。斯くての如

くにして彼等の住宅が寺院化せられ、又一方寺院が住宅化されて行く所に彼等の現実生活が如何に強く彼岸的志向に導かれてゐるかを知らざるは出来ると。兎に角、彼等の思念はこれらの美を通して直ちに浄土に致る事である。往生要集の浄土の十衆を現実の現存の遺物に徴するならば、平等院鳳凰堂の建築、その内部の構成、又は定朝式の仏像の有る精神弄にも見られるであらう。鳳凰堂の建築は完全なる左右相称によつて無限の静止を湛へてゐるが、しかもそれは地上の物ではなくて天空より舞降りた物が今や地上に降り立つた事である。中央の入門屋造りの大屋根は湛重ではあるが、その下層に重なる三葉の楯は此れを軽やかに浮べてゐる。その大屋根の左右に翼は伸び、両端は直角に屈折した切妻に終つてゐる。そしてその屈折した角に宝形の窓櫺がその切妻と調和して安定して据えられてゐる。それらの屋根の有つたならば句配と優美な曲線との反復、殊にその名の屋根の四隅のやや急な反り弄は此の建築全体を、恰も中空に浮ぶ鳳凰の気高き翼の如く思はしめる。其処には完全なる調和による安らかなさがあり、飛揚するものの崇さと軽快とが、又浮動から静止に向う瞬間に達ける応場な、優美な曲線が示されてゐる。此の建築に対する時空々の心は、調和と静止による永遠の美に憧れ、此の美しき翼は再びその世評へと仰るやかに羽搏きをするかの如く感じられるのである。更に又此の堂の内部は、その定朝作の本尊を中心に完全なる調和によつて構成されてゐるのであつて、此の事は既に屢々注目されてゐる事である。絵畫と彫刻と建築とが此処に於て完全に融合統一されて西方浄土を現出してゐる。衆生に憐みを皇れる如き阿彌陀如来の慈眼を仰ぎ、その柔和円満な相好や宥から腕、腕から膝へと流れるなだらかな曲線とふくらみ、及び整へられ、軽く流れる衣紋の美しさに注目する時、吾々は定朝式の仏像の有つ心は即ち平安朝貴族の求めたる

心情に外ならぬ事を知る。内面的な物はあるにしても、それは自らを鍛錬する意志的な物ではなく、完全を目指しての不完全なる現実の苦悩でもなく、満ち足りたものの守、完成せられ盡へられ、安心と静止の状態に於て夢見、憧れる一種の放心的な表情であり、又和められたる悲哀の後に来る邪惡の如き表情でもある。仏体は二重の光背を貫ひ、金色の彩雲は渦巻きつつ、高く天蓋を指す。天蓋は八葉の蓮糸によつて方形に統一され、その唐草の透彫り、細き紋様はそのまゝ天井の螺鈿の裝飾に連絡する一方、光背中の化仏は堂の空間に並ぶ雲中供養仏と連絡し、如來を見上げた眼はかくて御堂の上半の世界に眩けられ、其処に彫和を形作る技巧の一々の美しこの中にさまよう。そして像から上部への展席に灯籠して下部へは台座の変化に同様の展席があり、四方の壁には九岳浄土が描かれてゐる。或場面には五色の雲棚孔きて聖衆未迎し、又或場面に於ては舞衆が奏せられてゐる。此等の有り様は必ずしも平等院のみではなかつたであらう。平泉の中尊寺の如きも又同じ世界を示してゐる。争するに此等は彼等の理想と憧憬との場前であつた。聖と美とは共に存し、放蕩と愉悅とが共に有る。美は一度彼岸の世界によつて攝取せられ高められてゐるが、その本質に於ていささかも彼岸の求めた美と異なる性質の物ではなかつた。浄土を現実と頭はす事、即ち彼岸の現世に求めた美、そのものをより高き姿に構成する事であり、その美の世界……調和と静止と哀愁とに於ける美の世界に住して心を慰める事、即ち寂滅の浄土に遊ぶ事に外ならなかつた。

以 上